

## 先師に学ぶ、わが会の根本精神

上 廣 榮 治

風薫る五月。創立五十五周年という大節まであとわずか。皆様もおさおさ怠りなく「もの前」の精進に励まれておられることと思います。私も何かとこの大節が気にかかり、先師が残された文章を読み返したりすることの多い日々を送っております。

そんななかで、次の一文に行き当たりました。

「実践倫理宏正会の本旨は、万人に地上の眞実（倫理）を知らしめ実行させることにあります。たとえ会友以外の人にもせよ、人である以上は、（倫理を知ると知らぬにかかわらず）、一人のこらず、実はこの生活律に覆われており、倫理を離れて存立する人は、地上には一人もおらないのであります。したがって、全世界二十八億の人類は広い意味でみな会友といえましよう」（『実践の生命』）

人が人である以上は、倫理を離れては存立しないということです。地球上のすべての人間が倫理によって生きているのだと。まことにその通りであると、深く教えられた思いでした。現に、どなたにお会いしても、彼がどこの国の人であるかを問わず、どのような主義や宗教を奉じ、いかなる生活環境にあるにせよ、わが会が申しあげる徳目に反対することはないのであります。

愛和、喜働、素直、孝行、謙讓、寛容……。いずれに対しても、「そうです、私たちの国でもそれを大切にしています」「それこそ、私たちが生きていく上で最も大切なことです」と、誰もが言います。

しかし、それなのになぜ、先師はあえて「万人に……知らしめ実行」させねばならないと揚言しなればならなかったのでしょうか。なぜ、人類は数千年の昔から争い続け、倫理に悖る歴史を重ね、悲劇に泣かされ続けてきたのでしょうか。そして、「倫理社会」への道は、なぜかくも遠いのでありましょう。

ちょうどわが会が創立されたころ、フィンランドの作家ミカ・ワルタリという人が「エジプト人」という小説を発表してベストセラーになっています。舞台は三千五百年前のエジプトです。臣下をはじめ世の人たちから狂人扱いされるほど理想主義的な平和主義者で人道家の青年王アクナートンと、この王に心を惹かれながらも現実的な対応のために、王とはまるで反対の軍事力重視の立場をとる戦士ホレンヘブとを対比しつつ、人類愛か武断政治かという問題を扱ったのです。

この時代のエジプトは、富みかつ強大な国でした。王の理想主義を押し通したとしても、他国につけ入られる心配はありません。それなのに、臣下も人民もそれを望まなかったのです。しかし彼らとて倫理の大切さは知っていました。つまり、彼らの倫理とは、エジプトという国のなかでだけのものだったのです。エジプトのなかでは倫理が行なわれても、版図の外に対しては、常に武断主義でのぞんだのです。

アクナートンの時代からずっと、人類はこの課題を乗り越えることができずにきたように私には思われます。自分たちは倫理によって存立している。だが、自分たちの倫理生活を守るためには、他との闘争も辞さない。他に対しては非倫理的であることも止むを得ない、と。長い間、そして今でも戦争はそうした「正義」の名の下で戦い続けられてきたのです。

しかし近代になると、この考え方に異議を申し立てる動きも出てきます。有名なスペインの画家ゴヤ

に、「戦争の惨禍」と名づけられた八十二枚に及ぶエッチングの作品があります。一八〇八年、フランス占領軍に対してスペインの人民が蜂起し、四年に及ぶ戦いが続きました。この絵は、ベルチーテの町でフランス軍が二万六〇〇〇人のスペイン人を切り刻んだ凄惨な殺戮などを克明に描き留めたものです。その制作中、「なぜこんな酷い絵を描くのか」と召使に尋ねられたゴヤは、「人々に野蛮なまねはやめろと永遠に言い残すためだ」と答えています。敵も味方もないのです。「人々」、つまり人類すべてに對する呼びかけです。ゴヤは戦争を「絶対悪」、あつてはならないことだと考えたのです。

しかし、それから二百年、戦争は絶えることなく起きました。途中に二度の世界大戦があり、原爆が使用されました。さすがにナチスの暴虐や原爆を経て、「戦争は絶対悪だ」という声が高まりました。

しかし、その戦争の惨禍を経験した戦後の日本でも、ゴヤの「戦争の惨禍」について「スペイン人民のフランス軍に対する憎しみをよく表わしている」と解説する人がいると、飯塚浩二さんはその著書「危機の半世紀」（文藝春秋新社）で嘆いています。戦争を全否定したゴヤを、単なる民族主義者に貶めていると言うのです。こうした人たちは、まだまだたくさんいそうです。そして、彼らもまた「自分は倫理的だ」と思い込んでいるのです。

なるほど先師の言われる通り、人は倫理によって存立しています。そしてほとんどの人が、自分は倫理的だ、少なくとも倫理に悖ることはしていないと感じています。あるいは「思ったがって」います。

しかし、その実態はどうなのでしょう。その「倫理」を自分の国、自分の地域、自分の家族、あるいは自分の内にだけに止めてはいませんか。それはとりもなおさず、自分の国がよければいい、自分の地域が、自分の家族だけがよければそれでもいいという考え方に通じていきます。そしてその行き着く先は、自分さえよければいいという、自己中心主義、自分勝手主義であります。

今、日本を混迷の淵に追いやり、世界のあちこちで人々に不幸をもたらしているものの正体が、そこに見えます。倫理とは「我も人ももの仕合わせ」を実現するための道筋です。自己中心主義はその対極にあるものです。ひょっとして、多くの人が自分は倫理に悖ることなどしていいと思いつつ、実はどんなでもない間違いを犯しているのではないのでしょうか。この点をこそ徹底的に検証しなければなりません。先師が「万人に地上の真実（倫理）を知らしめ実行させること」を会の根本目標に掲げたのは、まさにそのことだと思ふのであります。

アタナートン王の時代から、ほとんどの政治が自らの体制の利得のために、他者との愛和を阻んできました。他国に対する憎悪教育を行なって自国内の結束をはかる国は論外としても、平和友好、共存共栄を標榜する国も、その政治の現実には、他国を犠牲にすることも厭いません。

国家レベルでそうであるように、個人レベルでも同じです。倫理を以ってわかり合おうとはせず、好きだ嫌いだ、主義が異なる、宗教が違う、価値観が違う、フィーリングが合わないなどと、異なるところばかりを探して憎もうとばかりしているように思えてなりません。

これに対して私たちは、ただ倫理によってのみ生き、しかもそれを真摯に実践する者です。それでも相手が倫理を以って対応しない場合は、それだけ彼の迷妄の闇が深いだけのことです。こちらがひたすら倫理によってのみ対応していれば、いつかはその闇も晴れることは間違いありません。なぜなら、彼もまた人であるからです。

あなたは誰かを嫌っていませんか？ 誰かを憎んでいませんか？ もし、それがあるとすれば、そこにあなたの倫理の綻びがあるのです。気づいた綻びは直ちに繕って、一点の曇りもない真つさらな心で二十一世紀初の大節を迎えようではありませんか。